

眼鏡

小川未明

青空文庫

かず子^こさんが、見^みせてくれた紅^{あか}い貝^{かい}は、なんという美^{うつく}しい色^{いろ}を
 していたでしょう。また、紫^{むらさき}ばんだ青^{あお}い貝^{かい}も、海^{うみ}の色^{いろ}が、そのま
 ま染^そまったような、めつたに見^みたことのないものでありました。
 「ねえやが、お嫁^{よめ}にいくので、お家^{うち}へ帰^{かえ}ったのよ。そして、私^{わたし}に
 送^{おく}ってくれたのよ。図画^{ずが}の先^{せん}生^{せい}が、ほしいとおっしゃったから、
 私^{わたし}いくつもあげたわ。」と、かず子^こさんが、いいました。正^{しようき}
 吉^ちは自分^{じぶん}もほしいと思^{おも}ったけれど、おくれと口^{くち}に出^だしてはい
 ませんでした。かえって、反^{はん}対^{たい}に、

「なあんだい、もつと、もつと、きれいなものをかず子ちゃんは、知^しつていないだろう？」と、いったのです。かず子^こさんは、ぼんやりと、正^{しょうきち}吉^{きち}の顔^{かお}をながめて、

「もつときれいなものつて、貝^{かい}？ 石^{いし}？ 正^{しょう}ちゃんは、持^もつているの。」と、ききました。

「持^もつていないけど、あるよ。」

「ありやしないわ。」

「あるから。」

「じゃ、見^みせてよ。」と、かず子^こさんは、いいました。

正^{しょうきち}吉^{きち}は、ただ、なんでも悪^{わる}口^{くち}をいつてみたかつたのです。なぜなら、自^じ分^{ぶん}の家^{うち}にいた女^{じよ}中^{ちゆう}のしげは、お嫁^{よめ}の話^{はなし}どころで

なく、いつも欲^{よく}深^{ふか}げな父^{ちち}親^{おや}がたずねてきては、外^{そと}へ呼^よび出^だして、おしげが働^{はたら}いてもらつたお金^{かね}を、みんな取^とり上^あげていつてしまつた末^{すえ}に、無^む理^りにおしげをよそへやつてしまつたのでした。それを考^{かん}えると、だれにもいうことなく、腹^{はら}が立^たつのであります。

「悪^{わる}口^{くち}をいうから、正^{しょう}ちゃんにはあげないわ。」

「いるもんか、かず子^こちゃんは、もつと、もつと、きれいなものがあるのを知^しらないだろう。」

このとき、正^{しょう}吉^{きち}は、ほんとうにきれいなものがあるのを思^{おも}ひ出^だしたのでした。それで、ほくほくしていると、

「ああわかつた、正^{しょう}ちゃん、お花^{はな}でしよう?」

「花^{はな}なもんか。」

「正ちゃんしょうちゃんの知しっているもの？」

「うん、そうだよ。」

「ありやしないわ。」

かず子こちゃんは、勝ち誇ほこったように、片足かたあしを上げあげて、トン、トンと跳はねました。

「じゃ、きてごらんよ。」

正吉しょうきちは先さきに立たつて、くさむらの中なかへ入はいりました。木きにからんだ、からすうりの葉はに止とまっている、うす赤あかい蛾がを捕とらえました。

「ほら、かず子こちゃんの貝かいより、もつときれいだろう。」
生きていいる蛾がのほうが、貝かいがらよりもきれいであります。け

れど、かず子さんは、気味悪がって、その蛾を取ろうとしません
 でした。

「ほんとうに、きれいだわね。ついている白い粉、毒でしよう。」
 「あとで、手を洗うからいいよ。数珠玉だって、この青い貝よ
 りきれいだぜ。」

「やっぱり、私、貝がらのほうがいいわ。だって、海にあるんで
 すもの。」

海ときいて、正吉は、だまって、考え込んでいました。

「正ちゃん、なにしてんだい。」

そこへ、義雄くんがやってきました。義雄は、小さな空きかん
 を握っていました。

「みみずを取りにきたの？」と、正吉しょうきちが、きくと、彼は、頭かかれあたまが横よこに振ふつて、

「君きみ、がまがえるを見みない。」といいました。

「ひきがえるなら、私わたしの家うちのお庭にわにいてよ。」と、かず子こさんが、
いいました。

「いまいる？」

「雨あめが降ふると、出でてくるわ。」

「なあんだ、そんなんじや、しかたがないよ。」

「がまがえる、どうするんだい。」と、正吉しょうきちがききました。

しかし、義雄よしおは、きかぬふりをして、

「正ちゃんしょうちゃん、僕ぼく、よく釣つれるところをきいたから、こんどの日にちよ

曜にゆかない。」と、話をそらしました。

「義雄さん、ほんとう、つれていってくれる？」

正吉は、目をまるくして、義雄を見ました。義雄は、うなずきました。

「どっかに、がまはいないかなあ。かたつむりでもいいんだけど

」。

釣りにつれていってくれるといっただので、正吉は、もう有

ちようてん
頂天でした。

「かたつむりでもいいの、かたつむりなら、僕、さがしてあげる

よ。」

正吉は、くさむらの中を潜って、かけずりました。そして、

義雄よしおが、まだ一びきも見みつけないうちに、正吉しょうきちは、三びきも見みつけて、義雄よしおに与あたえました。

「これだけあれば、いいよ。」

「義雄よしおさん、飼かっておくの。」と、正吉しょうきちは、ききました。

「学がっこう校もへ持もっていつて、理り科かの時じ間かんに解かい剖ぼうするのだよ。」

「えつ、殺ころしてしまうの?」

正吉しょうきちは、ぞつとしました。それなら、捕つかまえてやるのではなかつたと思おもつたが、もうおそかつたのです。心こころの中なかが、急きゆうに暗くらくなりました。そして、なにもかも、おもしろくなかつたのです。

「かわいそうだなあ。」

やった、かたつむりを取とり返かえす、いい智ち慧えが浮うかんできません

でした。

「毒どくびんの中なかに入いれると、苦くるしまなくて、死しんでしまうのだよ。」
 と、義雄よしおは、心配しんぱいする必要ひつようはないと、いいました。けれど、
 正吉しょうきちには、命いのちを取とるといことが問題もんだいなのです。義雄よしおは、
 びんの中なかへ、草くさの葉はも入いれて持もってゆきました。いつのまにか、
 かず子こさんはいなくなりました。正吉しょうきちだけ、いつまでも自分じぶん
 のしたことを後悔こうかいしていました。

一一

学がっ校こうで、正吉しょうきちは、とりわけ青木あおき、小田おだとは仲なかよしでした。

三人は、昼の休み時間に、運動場へ出て、木かげのところで話をしていました。

「僕、このあいだ、教室へいったら、ねずみの奴、机の上でパンくずを食べていたのさ。両手でこんなふうにはパンを持って、それはかわいらしかったよ。すぐ足音で逃げてしまったが、見たら机の上に、糞が二つ落ちていた。は、は、は。」と、青木が、いいました。正吉は、なんだか、そのねずみのようすが目に見えるような気がして、おかしかったので、

「小さいねずみ？」と、きいてみました。

「ああ、まだ子供なんだね。壁の下に穴があいているだろう、あすこから、出たり、入ったりするのだよ。」

「早く、穴をふさいでしまつたらおもしろいね。」

「二人では、できないな。」

三人は、いずれも動物が好きなので、目を細くして笑いました。ことに近眼の青木は、顔を上げて、眼鏡を光らしながら、そのときのおかしさを思い出したように、

「いま、いつたら、いるかもしれないよ。」といひますと、

「いつてみようか。」と、正吉も、小田も、たちまち同意しました。

三人は、肩を組み合つて、口笛で、

千里の山坂をつかの間に

過ぎゆく旅路のおもしろや

と、うたいながら、はじめはゆるい歩調で駆けていきましたが、途中から、小田が、独り大急ぎで、窓の下の方へ向かって走り出しました。なにか落ちていたのです。

「ああ、すずめの巣だ！」

こう叫んで、つぎに正吉が、駆け出しました。このとき、

たかさんのすずめが大騒ぎして鳴いている声が耳に入りました。

小田が拾った巣をのぞくと、一羽の子すずめが入っていました。

高い屋根の軒端にかかっているのが落ちたらしい。親すずめは、

三人の立っている頭の上を、心配して往ったり、きたりしまし

た。白く乾いた土の上へ飛ぶ影が落ちました。

「かわいそうだけど、あんな高いところへ、上がれないね。」

「僕、飼つてやろうかな。」と、小田が、いいました。

「ああ、そのほうがいいよ。」

「巢もいっしょに、かごの中へ入れておくといいね。」

二人は、小田に、そうすることをすすめました。いっしょか、ね

ずみのことなど忘れてしまいました。小田は、自分の帽子の中へ

すずめの巢を入れて、三人は、教室へ入ると、帰るまで、ど

うしておくかということを相談しました。このとき、カチンと

いって、ドアの開く音がしたので、三人は、振り向くと、監護

当番の赤い印を胸につけた、六年生が二人こちらを見守つて

いました。

「君たち、お教室でなにをしているの？」と、一人が、たず

ねました。

「なにもしていない。ちよつと用事があつたんだよ。」と、正しょう吉きちが答こたえました。

「持つているのは、なに？」

「すずめの子をつかまえたんだよ。」と、小田おだが、いいました。すると、二人ふたりの六年ねんせい生は、そばへやつてきました。

「見みせて。」といつて、一人ひとりは、帽子ぼうしの中なかからすずめの巣すを取とり出だしました。子こすずめは、ふるえて、空そらの方ほうを見み上げて、チュツと鳴なき声こえをたてていました。それを聞きいて、親おやすずめが窓まどのあたりで、また、チュツ、チュツと鳴ないていました。

「かわいそうだから、早はやくここへ入いれて。」と、小田おだが、帽ぼうし子を

差し出すと、六年生の小西は、そのまま、すずめの巢を、あちらへ持つてゆこうとしました。

「だめだよ。」と、小田が、怒りました。

「すずめなんか、お教室へ持つてきては、いけないのだろう。」

二人の六年生は、いうことをきかずに、すずめを取りあげて、いこうとしました。

「失敬じゃないか。」と、小田が、真つ先になつて、その後を追いました。

「およしよ！」と、正吉も、叫びました。

「このすずめ、僕たちにおくれよ。先生にあげるのだから、僕

たち、理科の時間に、解剖をしてもらうんだよ。」と、小西が、
 答えました。

正吉は、解剖ときくと、ぞつとしました。義雄さんに、
 頼まれて、なにも知らずに、かたつむりを捕つてやったことが後
 悔されるばかりでなく、そのときのことを思い出すと、いまだ
 も腹が立つので、

「いけないよ、そんなことをしちや。」と、大きな声で、叫びま
 した。

「解剖するなら、君たち、かつてにすずめを捕つたらいいだろ
 う。」と、青木もいいました。

すると、二人は、そのまま逃げるようすをしましたから、三人

は、やらせまいとして、廊下で道をさえぎって、争い合いました。
 争いの最中に、小西のひじが、青木の顔に当たると、眼鏡が
 飛びました。

「おい、騒いじやいかん、なんで、運動場へ出ないんだね。」
 こういつて、止めたものがあります。みんなが、びつくりして
 見ると、髪を長くして、赤いネクタイをした、凶画の先生であ
 りました。先生は小使い室へ用事があるので、教員室を出
 て、ちようど通りかかったのです。

「先生、こんなすずめの巢をお教室へ持って入るのです。」
 と、六年の山本が、告げました。

「先生、教室で遊んでいたのではありません。帰りに持って

帰ろうと置きにきたのです。」と、小田が、弁解しました。

図画の先生は、両方の言い分をきいていられたが、

「そんなものを、教室へ持って入っては、いけないな。」と、おっしゃいました。六年生は、それ見ろといわぬばかりの顔つきをしました。

「先生、僕たちの拾ったすずめを、だまって持っていていこうとするから、いけないのです。」と、青木が、六年生の行為を非難しました。

先生はこうなると六年生をいいとはいえませんでした。し

ばらく、先生は黙っていられると、六年の山本が、

「吉村先生にあげて、理科の時間に、解剖していただく

とおも
と思つたのです。」と、こた答えました。

「解剖かいぼう！」と、わか若い凶画げうがの先生せんせいの目めは光ひかつて、やまもと山本の顔かおを
み見られました。

「そうです。僕ぼくたち、このごろ、いろいろのものを解剖かいぼうして、
なら習ならつていゝのです。吉村よしむら先生せんせいは、へびでも、小鳥ことりでも、捕とら
えたら持つてこいとおつしやつたのです。」と、こにし小西こにしが、いゝました。

しようきち正吉しょうきちは、このとき、いゝ知しれぬ腹はら立たたしさがこみ上げあてき
ました。

「僕ぼくたち屋根やねからおつこちたすずめを助たすけてやろうと思おもつていゝ
のころに殺ころすなんて、そんなことできません。解剖かいぼうしたかつたら、

自分で取ってくればいいのです。」

正吉は、こういいました。しず子さんが、美しい貝をあげた先生は、この先生だと思おうと自分のいったことをわかつてくださるにちがいないと思いました。

図画の先生は、目をぱちぱちさして、どちらにも理屈があるので、判断に苦しむといったようすでしたが、窓ぎわへきて、子を案じて鳴いている親すずめの鳴き声が耳に入ると、急に先生の顔色が明るくなりました。

「君たちのいうことは、よくわかった。一方は、理科の知識を得るためだというのだし、一方はかわいそうだから助けるというのだ。どちらも悪いとはいわれないが、いちばんいいのは、この子

すずめを親おやすずめに返かえしてやるんだね。」と、先生せんせいはおつしや
いました。

「ああ、それがいいのだ。」と、正しょう吉きちは、思おもいました。

「先生せんせい、あの高たかい屋根やねへどうして上あがれますか!」

小田おだが、先せん生せいの言こと葉ばの終おわるのを待まって、問といました。

「あすこへは上あがれませんね。しかたがないから、物置ものおきの軒のきし

下たへでも小使こづかいさんさんに頼たのんで入いれてもらうのだ。そうすれば、

親おやすずめがきて、世話せわをするでしょう。」と、先せん生せいは、おつし

やいました。

「やはり、それがいい。」と、青木あおきも、小田おだも、賛成さんせいしました。

六年生ねんせいの二人ふたりは、反はん対たいしなかつたが、だまつていました。

「それでいいなら、私が、小使いさんに頼んであげるから。」
 「先生、お願いいたします。」と、四年生の三人は、声をそろえて叫びました。

図画の先生は、すずめの巢を大事そうに持って、はいつてる子すずめを慰むるようにして、あちらへいつてしまわれました。これで、とにかく、ひとまず事件が終わってしまったので、六年生の二人も、あちらへ去ろうとしました。すると、突然、

青木が、

「君、僕の眼鏡をわったね。」と、青い顔をして、六年の小西を呼びとめました。みんなは、驚いて、その方を見ました。

「僕が、君の眼鏡をわったって！」

小西は、青木の差し出した眼鏡を見つめました。なるほど、片方の玉に白いひびが入っています。

「君のひじが当って、眼鏡が飛んだんだよ。」と、青木が、説明しました。そういわれると、小西も、「ああ、あのときか。」と、思ったのでありましょう。じつと眼鏡を見ていましたが、「知らんでしたのだから、かんにんしてね。」と、素直に、わびました。

こうわびられると、かえって、青木が返事に窮してしまいました。それは、なぜでしょう？ みんなの視線が彼の顔を見守ると、さもいいにくそうにして、

「僕は、いいけれど、お母さんが……。」と、いいよどみました。

「しかられるの。」と、小西こにしが、きき返かえしました。青木あおきは、うなずきました。

青木あおきの家うちは、荒物屋あらものやで、父親ちちおやはどうになくなって、母親ははおやと二人ふたりでさびしく暮くらしているのです。その家うちのことをよく知している、正吉しょうきちや、小田おだには、むしろ、青木あおきの立場たちばに同情どうじょうされたのであります。そして、すずめの巢すよりも、このほうが、問題もんだいに思おもわれました。

「お家うちへ行って、あやまればいいだろう。」と、正吉しょうきちがいいました。

「家うちへ行って、あやまらなくても、半分はんぶん弁償べんしょうすればいいだろう。」と山本やまもとは、小西こにしに味方みかたして、いいました。

しばらく、だまって考えていた小西は、
 「君、お母さんにしかられるようなら、僕、弁償するよ。」
 こういったとき、ちようどベルが鳴ったので、六年生の二人
 は自分たちの教室の方へ、走っていきました。

三

青木は、小西が、あやまりにきてくれなかつたので、わつた眼
 鏡の球代を半分、弁償してもらうことにしました。そし
 て、このことを正吉と小田に話すと、二人ともいっしょにい
 こうといってくれました。

「眼鏡屋の受取証を忘れずに、持ってゆくんだぜ。」と、小田が、注意しました。

正吉は、学校から帰ると、道順から、青木と小田の誘いにくるのを待つ間、金魚の水を換えたりしていました。やがて、外で二人の声がしたので、正吉は、家を出たのであります。

小田が、小西の家を知っているというので、ほかの二人は、ついていきました。さるすべりの咲いている家の垣根について曲がると、お湯屋がありました。その付近には、小さな商店が、かたまっていました。小西の家は、その中の青物屋でありました。こちらから見ると、なすや、きゅうりや、大根などが、

みせさき
店先にならばられて、午後ごごの赤色あかいろをした日の光ひひかりを受けていま
した。

こにし
小西は、もう学校がっこうから帰かえつて、家うちのてつだいをしていました
が、貧ますしげなようすから見みて、正しょう吉きちは、なんだか、金かねを出ださ
せるのは、かわいそうな気きがしました。

にん
三人は、小西こにしが、こちらを向むいてくれるのを待まっていました、
なかなか向むきそうもありませんので、

こにし
「小西こにしくん！」と、ついに、小田おだが、小ちいさな声こえで呼よんだのであり
ます。きこえたとみえて、小西こにしは、じつとこちらを見みました。そ
して、につこり笑わらうと、彼かれの姿すがたは、奥おくへ消きえて見みえなくなりまし
た。

「どうしたんだらうね。」

「いま、出てくるよ。」

こんなことを話しているところへ、小西が走ってきました。青

木は、小西に向かつて、

「君、半分弁償してくれない？」といいました。

「いくらなの？」と、小西は、ききました。

青木は、上衣のポケットから、眼鏡屋の受取証は出して渡

しました。

「家まで、きてくれない。」

三人は、小西のあとについてゆきました。店の次の間では、小

西の父親らしい人が、肌脱ぎで、若い男を相手にして、将棋

をさしていました。小西こにしが、受取証うけとりしょうを父親ちちおやに見せると、父ちち親おやは、しばらくだまって考えかんが込んでいました。将棋しょうぎの相手あいてをわかしている若い男おとこが、「どうしたんだ？」と、のぞき込みこました。父親ちちおやは、説明せつめいしているらしくったのです。すると、その若い男おとこは、なにか小さな声こえで、理屈りくつをいつているらしくったが、たちまち、三人にんのいる方ほうへ顔かおを向むけて、
 「みんなが騒さわいで、わつたのだから、みんなで弁償べんしょうするのがあたりまえでしょう。一人ひとりに半分はんぶん出させる法ほうはないだろう。」
 と、おどすような口調くちようで、いいました。三人にんは、思いがけない反対はんたいに出であつて、たがいに顔かおを見合あわせました。
 「子供こどもだと思おもつて、ばかにしている。」と、小田おだがつぶやきまし

た。

このとき、正吉しょうきちは、その男おとこをにらんで、

「いくら、おおぜいが騒さわいでも、眼鏡めがねを飛とばさなければ、われなかつたんだらう。」と、いくらか、せき込んで答こたえました。これに對たいして、若い男わかおとこが、なにかいおうとすると、

「自転車屋じてんしゃやのおじさん、いいんだよ。」と、小西こにしは、むりに男おとこを押おさえました。そして、三人にんを引ひつ張ばるようになして、湯屋ゆやの前まえのすこしばかりの空あき地ちへきました。

「きつと、あげるよ。今こんげつ月の末すえまで、待まつてくれない？ 僕ぼく、新聞しんぶんを配達はいたつしているのだから、お金かねをもらつたら、すぐ持もつていくよ。」

そういった、小西の顔色にも、言葉にも、真実があらわれ
ていました。

「ああ、いつでもいいんだ。」

青木は、こう答えました。彼は、小西の境遇に同情し

たばかりでなく、むしろ、感心な少年だと心を打たれたの
です。正吉も、小田も感じたことは、同じでありました。

三人は、また、もときた道を帰りました。最後まで、黙ってい

た父親や、おどそうとした若い男の顔は、三人の目にいつまで

も残っていて、不快な感じがしたけれど、小西からは、まったく

それと反対な、快い印象を受けたのであります。自分たち

の世界は、別だと考えたのは、ひとり正吉だけではなかったの

です。いま、小西こにしに対してたい感ずるものは、友愛ゆうあいの情じょうよりほかに
ありませんでした。

「あつ、渡り鳥わたどりが！」と、小田おだが、大空おおぞらを指さしました。はるか
に、空そらをたがいにいたわりながら、遠く旅とびをする鳥とりの影かげが見みられ
ました。

三人にんは無む限げんの感かん慨がいで、見みえなくなるまで、いつしよに、その
鳥とりの影かげを見送おくつていたのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 二」講談社

1977（昭和52）年9月10日

1983（昭和58）年1月19日第5刷

底本の親本：「未明童話 お話の木」竹村書房

1938（昭和13）年4月

初出：「お話の木」

1937（昭和12）年9月

※表題は底本では、「眼鏡《めがね》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2016年12月9日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

眼鏡

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>